

無くしたものの価値を思う

2月4日、スキー教室が行われました。たくさんの方の保護者の方、地域の方に協力をいただき、無事に終わることができました。本当にありがとうございました。何より、「楽しかったよ」「スキーができるようになったよ」「嬉しかったよ」と話してくれる子供たちの笑顔がとても素敵でした。実に先日まで行われていた、ミラノ・コルティナオリンピックでの各国選手の活躍は、こういった幼少期からの経験の積み重ねが大きく関係していることは信じずにはられません。

さて、年に1度しか使わない、やらないものにお金をかけるのに抵抗があるという話を聞くことがあります。まさに、スキー教室もそれにあたるかもしれません。学校現場でも、授業時間を確保するために、行事やその練習にかかる時間を見直してきました。これらの動きは、多くの学校で必要に迫られてのことと致し方のない部分があったように思います。しかし、私は何でもかんでも「無駄なもの」として切り捨てていくことには慎重にならなければならないと考えるようになってきました。合理性を追求するあまり、本当に必要なものや大切なものまで無くしてしまっているような気がしているからです。例えば先月行われた書初めですが、滑川市は（ずいぶん前になりますが）だるま筆という太い筆を購入して一回り大きな紙で書いていました。通常の手で書初めを行うことで伝統文化を経験させるには十分であるという考え方もあります。しかし、たとえ1年に1度であっても、やはり太い筆でダイナミックに書いてみるという経験は貴重なものだと考えることができます。大人になってから、だるま筆で書くという経験をするのはなかなかできません。また、スキーに関しても、親の世代からスキーをやる人は減っていますし、ウィンタースポーツ自体の人気にかげりがでてきているようです。そんな現状であるにしても、雪国で生まれ育った子供が、スキーを経験せずに大人になるというのは、もったいないような気がします。それがたとえ年に一度の活動であっても、家から連れて行ってもらうことがないものだとしても、それだからこそ、余計機会を与えて、そのことに向いている子供や興味・関心が湧いてきた子供は、それを始めるきっかけになればよいと思うのです。時間が経つにつれて無くなったものの価値が見えてくるようになりました。

いよいよ納めの月、3月を迎えます。保護者の皆様、地域の皆様におかれましては、いつもご理解とご協力をいただきましてありがとうございます。まだまだ寒い日が続きます。十分気を付けてお過ごしください。

(校長 村杉 一也)